

抑草期間の長い除草剤による省力、省資源水田除草体系

(農試 技術部、県南分場)

1. 背景とねらい

現在、米の生産性を高めるため省力、低コスト生産が強く求められている。

一方、環境保全のため農薬の散布量を減少させることが、省資源と合せて期待されている。現在までに開発された薬剤の中から4薬剤が1回散布で従来の2回以上散布する除草体系並の効果があり、水稲の収量に影響のないことが確認された。

これらの薬剤の特性を生かし、1発処理剤として効果を高めるための使用方法を示し、除草体系合理化のための参考に供する。

2. 技術の内容

1) 薬剤の種類と特性

商品名	剤類名	成分及び主作用 非ホルモン型(N) 移行性(T)	主な対象雑草	主要雑草殺草幅(%)					特性
				ノヒエ	ホタルイ	ヘラモタカ	ミスガヤツリ	ウリカワ	
オーサ 粒剤	ナフロアニリ ド・フタクロール 粒剤	ナフロアニリド 7.0% フタクロール 3.5% (N)(T)	ノヒエなどの1年 生雑草、マツバ、 ホタルイ、ヘラモタカ ウリカワ、ミスガヤツリ	1.0	発生始	発生始	発生始	2.0	普・B
ヨートル 粒剤	ナフロアニリド・ フレチラクロール 粒剤	ナフロアニリド 7.0% フレチラクロール 2.0% (N)(T)	同 上	1.0	発生始	発生始	発生始	2.0	普・B
クサカリン 粒剤 25	ピラソレート・ フタクロール 粒剤	ピラソレート 6.0% フタクロール 2.5% (N)(T)	ノヒエなどの1年生 雑草、マツバ、ホタルイ ヘラモタカ、ウリカワ、ミス ガヤツリ、ヒルムシロ	1.5	発生始	2.0	2.5	2.0	普・B
クサホフ 粒剤	ピラソレート・ フレチラクロール 粒剤	ピラソレート 6.0% フレチラクロール 1.5% (N)(T)	同 上	1.5	発生始	2.0	2.5	2.0	普・B

2) 使用方法

(1) 従来の初期除草剤に比べ処理時期が移植後3~7日と処理適期幅が大きく、体系処理の初期除草剤として使用できるが、抑草期間も極めて長期間及ぶため中期剤を省くことが可能である。

(2) 各薬剤とも殺草効果を表わす分解生成物が水に溶けやすいため、水の移動が大きい圃場では、除草効果を著しく低下させるので、とくに漏水が少く、かけ流しをしない水田を対象に使用する。

(3) 中耕作業によって処理量が破壊され抑草期間が短縮することがあるため中耕作業は処理後2日以降に行う。

(4) 1回処理を毎年繰り返して実施した場合、多年生雑草や特定草種が残ることがあるので、数年ごとに従来の2~3薬剤を組合せて体系処理や、特定草種に対応した除草体系を組み入れること。

3) 使用基準

商品名	区分	処理法	使用時期	使用量	適用土壌 適用地帯	適用雑草名
オーサ <sup>®</sup> 粒剤 ヨートル粒剤	機械移植木 插.	茎葉部 土地処理	移植後 3~7日	3kg/ 10a	砂壌土~植土 (表土深2cm/日 以下 ヨートルは砂壌土 21cm以下 全層下)	ノヒエなどの1年生雑草及びマツバヤ ホタルイ、ヘラサダカ、ウリカワ、ミスカヤツリ
クサカリン粒剤25 クサホーフ粒剤						ノヒエなどの1年生雑草及びマツバヤ、 ホタルイ、ヘラサダカ、ウリカワ、ミスカヤツリ ヒルムシロ。

### 3. 指導上の留意事項.

- 1) この除草体系は漏水が少く、かけ流しを行わない水田に限って使用すること。
- 2) オモダカ、クログワイ、シズイ<sup>®</sup>の多発する水田では、従来の初期~中期~後期剤と組合せた除草体系で対応すること。又、ヒルムシロの発生する水田では、クサカリン粒剤25、クサホーフ粒剤を使用する。
- 3) 植代から田植までの期間が5日以上となる場合は、体系処理を行うか、植代直後に初期除草剤で前処理をしたあと本剤を処理する。
- 4) 中耕や中干しを行う場合は薬剤処理後25日以上期間をおいて行う。
- 5) 薬剤処理後、木插の生育に影響するような雑草の再発生が予想される際は、中・後期剤を散布する。

### 4. 参考文献・資料

- 1) 除草剤展示圃成績書 岩手県
- 2) 水稲関係除草剤試験成績書 昭和55年~59年 岩手県試導南分場。

### 5. 試験成績.

昭和59年度試験研究成果等普及促進打合せ会資料参照のこと。